



TITLE:

<技術・研究報告>瀬戸臨海実験所 構内におけるカタバミ(カタバミ科) 花柱3型の季節消長

AUTHOR(S):

久保田, 信; 梅本, 信也

CITATION:

久保田, 信 ...[et al]. <技術・研究報告>瀬戸臨海実験所構内におけるカタバミ(カタバミ科)花柱3型の季節消長. 瀬戸臨海実験所年報 2008, 21: 37-38

ISSUE DATE:

2008-12-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/179072>

RIGHT:

瀬戸臨海実験所構内におけるカタバミ（カタバミ科）花柱 3 型の季節消長

久保田 信¹⁾・梅本信也²⁾

Phenology of three styly types of *Oxalis corniculata* (Oxalidaceae)
in the campus of the Seto Marine Biological Laboratory, Kyoto University

Shin Kubota¹⁾ and Shinya Umemoto²⁾

1) 京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所（〒649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町 459）

2) 京都大学フィールド科学教育研究センター紀伊大島実験所（〒649-3632 和歌山県東牟婁郡串本町須江）

はじめに

瀬戸臨海実験所構内一帯および島島や小丸島で冬季を除き晴天の昼間に開花するカタバミ *Oxalis corniculata* Linn. の花柱型の頻度差について、2006 年 9 月以降 2007 年 11 月まで筆者らが調査した結果、人の出入りが多い構内では、そうでない 2 島（島島と小丸島）とは対照的に、飛散花粉を受け入れやすく、かつ他家受粉しやすい長花柱型が中花柱型よりも出現頻度が高いことが判明した（久保田・梅本、2006, 2007）。この頻度差が年月の経過とともに顕著になっていくという予想をもって、今回、開花が見られ始めた 2008 年の 3 月 12 日から開花がほぼ終了した 12 月 12 日まで毎月 1 区域で調査した。その調査区域は、前年と同じで、そこでは初年度調査の 2006 年に中間型を含む 3 型が同時に出現した構内で唯一の地点である。そこは、所員

をはじめ、定期的（週一度）に訪問する業者ほか、外来研究者が出入りする区域で、合併処理室の北部と西部をあわせた小区域で人の通り道もある（久保田・梅本、2006）。今回は、毎月、開花した花をできるだけすべて採取し、それぞれの型の頻度を調べた。

結果と考察

総計 1198 花を検査した結果、3 型のカタバミの花は春夏秋のいずれの季節にも今回の調査区域でみられ、構内の大半の他の区域のように長花柱型の 1 型だけになる（久保田・梅本、2006）ということとはなかった。3 型の中で、以前からの傾向のように、中花柱型個体の出現頻度は依然として低く、出現があった 6 ヶ月では 2.0-12.5%/月（9 ヶ月全体では 2.9%）であった（表 1）。

表 1 2008 年における瀬戸臨海実験所構内の合併処理室の北部と西部区域でのカタバミの花柱型の月ごとの頻度変化

調査月	開花し調査できた日数*	花の総数	3 型の頻度 (%) :		
			長花柱型	中間型	中花柱型
3 月	10	126	90 (71.4)	28 (22.2)	8 (6.3)
4 月	11	705	104 (14.8)	587 (83.2)	14 (2.0)
5 月	4	241	42 (17.4)	191 (79.3)	8 (3.3)
6 月	3	35	19 (54.3)	16 (45.7)	0
7 月	4	7	1 (14.3)	4 (57.1)	2 (2.9)
8 月	4	16	4 (25.0)	10 (79.3)	2 (12.5)
9 月	4	13	4 (30.8)	9 (69.2)	0
10 月	7	26	19 (73.1)	6 (23.1)	1 (3.8)
11 月	5	18	7 (38.9)	11 (61.1)	0
12 月	4	11	5 (45.5)	6 (54.5)	0
3-12 月	55	1198	295 (24.6)	868 (72.5)	35 (2.9)

*: 調査しても開花がなかった日数は除く

3-5 月にかけてのみ開花は多数みられ、6 月以降は開花数が激減した。つまり、夏季にはほとんど開花がみられず、秋季がきてても開花数は増加しないままであった（表 1）。そのため、3-5 月までのデータに絞った考察とすると、今回は、前回までの調査結果と異なり、3 月だけを除き、予想に反して長花柱型個体が優勢とならなかった。この理由として、各型間での増殖率や栄養繁殖様式の差があるものと推察される。種まき発芽実験や栄養繁殖試験が将来実施される必要がある。

概要

開花がみられた 2008 年 3 月中旬から 12 月中旬にかけての 9 ヶ月間、瀬戸臨海実験所構内 1 小区域（3 型が同時に出現する唯一の区域である合併処理室の北部と西部区域）で、月ごとに開花した花をできるだけ多数検査した。1198 花の検査の結果、3 型のカタバミの花は

春夏秋のいずれの季節にもみられた。以前からの傾向のように、中花柱型個体の出現頻度は依然として低く、出現があった 6 ヶ月では 2.0-12.5%/月（9 ヶ月全体では 2.9%）であった。多数が開花した 3-5 月では、3 月を除き中間型が 4 月に高頻度（83.2 %）で出現し、長花柱型が徐々に増加するという予想とは異なった。

引用文献

- 久保田 信・梅本信也. 2006. 瀬戸臨海実験所構内におけるカタバミ長花柱型カタバミ（カタバミ科）の分布. 瀬戸臨海実験所年報, 19: 38-39.
- 久保田 信・梅本信也. 2007. 瀬戸臨海実験所構内ならびに田辺湾島・小丸島における長花柱型カタバミ（カタバミ科）の分布様式. 瀬戸臨海実験所年報, 20: 33-35.